

ノーベル文学賞候補にも

# 賀川豊彦を再評価

## 人物像に思いはせ

徳島  
フォーラム

日本を代表するキリスト教思想家で社会運動家の賀川豊彦（1888～1960）に光を当てるフォーラム

「賀川豊彦の再評価―21世紀のグランドデザイナーとして―」が10日、徳島市藍場町2の県郷土文化会館（あわぎんホール）で開かれた。意見交換のシンポジウムもあり、集まっ

た約280人が人物像に思いをはせた。

賀川は幼少から青年期を県内で過ごし、旧制徳島中時代に洗礼を受けた。協同組合運動や労働運動などに幅広く活躍し、1920年出版の自伝的小説「死線を越えて」は3部作計400万部のベストセラーに。今年賀川が布教や貧民救済に取り組んでから100年で、9月には日本人初のノーベル文学賞候補（47、48年）になっていたことも判明している。

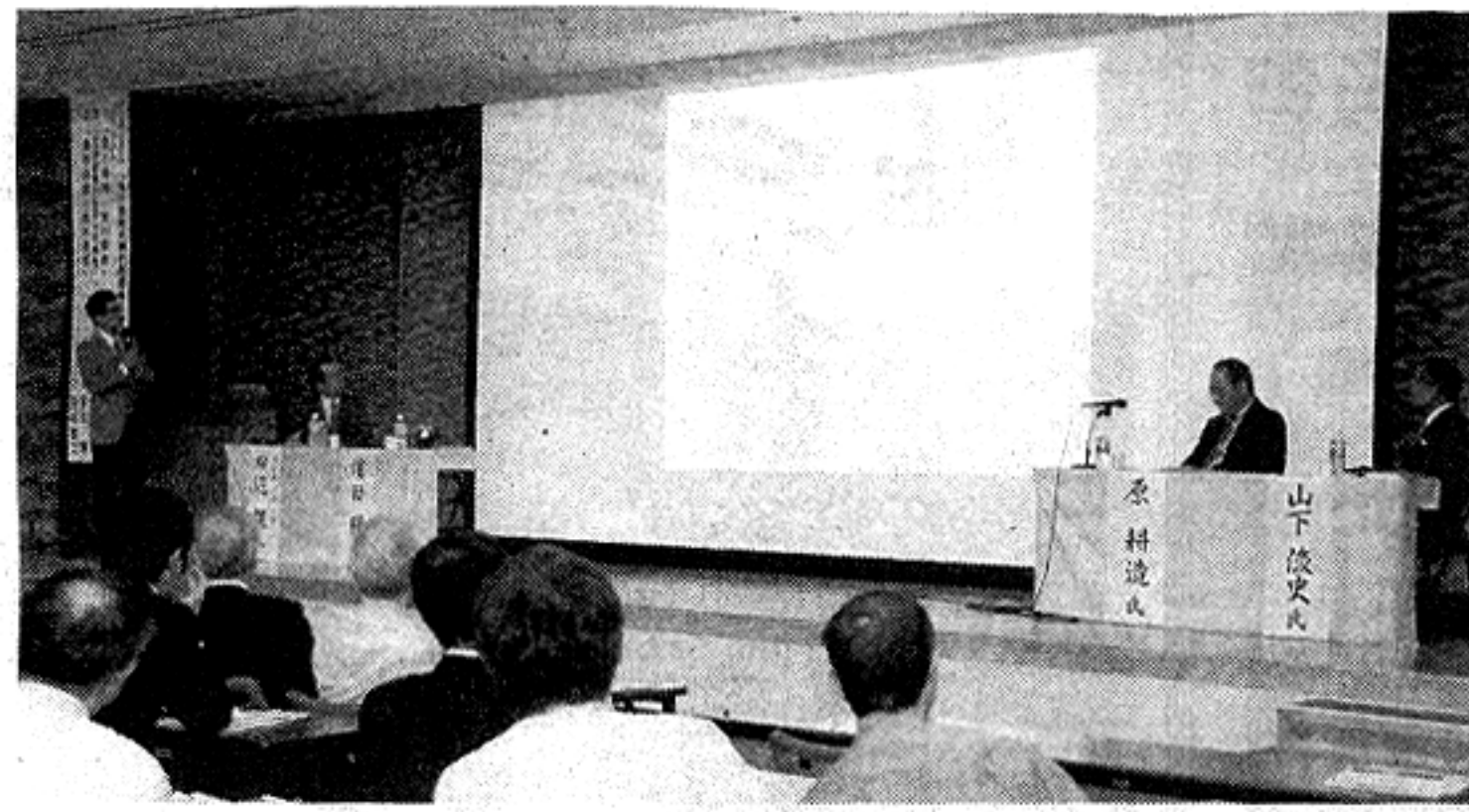
この日は野尻武敏・

神戸大名誉教授が基調講演し、「資本主義や近代文明に対する賀川の批判は現代でも有効」と強調。日本生協連の山下俊史会長、NPO法人生物多様性農業支援センターの原耕造理事長、濱田陽・帝京大准教授らは、それぞれの立場から賀川の現代的意義を主張した。

館の田辺健二館長は「平和賞に加え文学賞の候補だったことも明

らかなり、再評価の機運が高まっている。今回がきっかけになれば」と話していた。

【井上卓也】



賀川の生涯や思想について意見が交わされたシンポジウム  
―徳島市の県郷土文化会館で

鳴門市賀川豊彦記念